

『更級日記』の夢と信仰
—「前世の夢」をめぐる—

樊 穎*

Dreams and faith in the *Sarashina Nikki*:
Concerning “the Dream about the Previous Life”

FAN Ying *

For ancient people, dreams were very important as something closely associated with life, and believed to be the “prophecies” of a god or Buddha. It was not unusual for people to record the content of a dream, believed in a dream, and acted according to what they saw in a dream. In literature, the word “dream” was used frequently in the traditional Japanese poetry known as *waka*, *monogatari*, *nikki*, and various other styles of literary works, so that it serves as an important clue to understand those works. Among other things, the *Sarashina Nikki*—written in the late Heian period in the 11th century—is attracting attention, because it contains as many as 11 cases of dreams that the author actually saw, which are more than those found in other diaries written by women, in terms of the ratio to the total volume.

Among those 11 cases, one is a dream about the previous life of the author *Sugawara no Takasue no musume* herself. In this dream, a Buddhist priest who seemed to be the head of Kiyomizu Temple told her that in her previous life she was a sculptor of Buddhist images for the temple. Many of the existing studies have pointed out that this “dream about the previous life” was a turning point in her attitude toward dreams, from her addiction to stories to her awakening to religious faith. Based on this recognition, some have contrasted her ideas about stories and about faith, and concluded that her attitude toward dreams that are deeply related to faith had changed from “not believing” a dream to “believing” a dream.

This article reviews *Takasue no musume*’s attitude toward dreams and faith, and explores the meaning and function of “the dream about the previous life” in the diary as a whole, as well as the relationship between dreams and her religious faith, by rereading sentences before and after “the dream about the previous life” in the diary.

* 城西大学助教

一 はじめに

夢は、古代においても現代においても、人々の生活に密着した大切なものであることは言うまでもない。ただ、現代のわれわれの夢に対する理解は、古代人のそれとは大きく違っているようである。古代人の夢に対する理解を確かめるには、当時の文学作品を読み解くのが一つの重要な方法である。と同時に、「夢」もそれらの作品を理解するための重要な手掛かりとなっている。

本稿は去年本誌第十七号に掲載された『更級日記』の夢——日記の構成と夢とのかかわり——の続きとして、継続して『更級日記』の夢に注目していきたい。同時代のほかの女流日記と比べ、作品の分量の割に、「夢」という語彙の使用頻度も夢に関する記事の頻度も高いことは、『更級日記』の特徴の一つである。

日記に記されていた十一例の夢の中に、作者菅原孝標女自身の前世についての夢が一例ある。清水寺の別当らしき僧に、前世は清水寺の仏師であったことを伝えられたという夢である。今までの研究では、この「前世の夢」は、孝標女の夢に対する態度の変化の境目であり、彼女が物語への耽溺から信仰へと目覚める境目であるというような指摘が多く見られる。そのため、孝標女の物語に対する意識と信仰に対する

意識を対置して捉えられ、信仰と深くかわる夢に対する態度の変化も、単純に夢を「信じない」から「信じる」に変わったと結論付けられてしまったことがあったようである¹⁾。

本稿では、「前世の夢」の前後の記事を読み直したうえで、孝標女の夢と信仰に対する意識を再確認し、「前世の夢」が日記全体に果たす意味と機能を捉え直し、夢と孝標女の信仰とのかかわりについて考察してみたい。

二 「前世の夢」の機能及び位置づけに関する先行研究

「前世の夢」を含め、『更級日記』に記されている十一の夢は、日記全体の主題や構想と深くかわっていることについては、今まで多くの研究者によって論じられてきた。まず、それらの先行研究を確認しておこう。

資料(一)

日記にこうした夢の数々が語られるのは、これの執筆される晩年において、作者自身の人生の推移を回顧し人生の全図に思いをいたすにつけても、自分の歩みのさまたまの段階における別の行為の選択によって、このように無残なものではなかった別のまともな人生に恵まれもしたであろうことを懺悔する心の磁場のうえに、重い意味

を持つてそれらが甦るからであった。

(秋山虔 新潮日本古典集成『更級日記』 解説 一四七頁)

資料 (二)

自分の一生を失意の連続の一生と考え、その原因を、若い時代の不信仰と、中期の信仰の不徹底に帰しているのだが、物語・歌と信仰とが対置され、その信仰は夢と分かちがたく結びついているというのが、この人の精神構造らしい。

(吉岡曠 新日本古典文学大系『土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』解説 五六四頁)

資料 (三)

それぞれの夢の多くは、それぞれの時点の作者の生活に、特に精神生活に深くかわつていたものであったであろう。猫や同僚の夢はともかくとして、当初は物語に、生活の現実が分かつてくるにつれて神仏、特に仏に傾斜するものが漸く多くなつていったのである。おおまかには、夢の否定、無視から肯定、依存に変貌していることがその所見によって読み取ることができる。

(今井卓爾『更級日記 譯注と評論』 評論 二二三頁)

資料 (四)

更級日記の夢も多くが神仏の教えであるが、作者の生き方を反映して、その夢の性質とその夢に対する態度は十五ⁱⁱと十六ⁱⁱⁱの間を境にはっきり分かれている。十五までは孝標女が物語に耽溺していた時代のもので、夢で神仏はそうした生活をいぶかり嘆き、反省を促している。ところが孝標女はそのさとしを誰にも語らず、意にも介さず、従おうとはしない。十六以降の夢では、神仏はいずれの場合も彼女の生活態度を嘉しているように思われ、孝標女も神仏の意を得たことを喜び尊しとしている。

(森田兼吉「夢よりもはかなき——女流日記文学と夢」 二二〇頁)

資料 (一) 秋山は、夢の記事が日記の主題である「懺愧」「悔恨」と深くかわつていることを指摘した。^{iv}

資料 (二) 吉岡は、その「悔恨」の理由として、物語や歌に耽溺し、神仏のお告げの夢を無視し疑念を抱くなどの「不信仰」を挙げ、「物語・歌」と「信仰」を対置している日記の構図を示した。^v 神仏のお告げの夢に対する態度を「信仰心」の有無を問う判断基準としている。

資料 (三) 今井は孝標女の精神生活の変化に伴い、夢に対する態度も否定、無視から肯定、依存に変貌したと論じた。^{vi}

資料（四）では、森田は、「前世の夢」は、ちょうど十一例の夢の真ん中あたりに位置しており、「前世の夢」を境に、日記に記された夢の性質と孝標女の夢に対する態度が大きく変化したと指摘した。孝標女が夢に対して無視・疑念から信頼・期待に変わり、物語への耽溺から信仰へ目覚め、神仏に対しても不信仰から信仰へと変わったと解釈した。^{vii}

つまり、上記の先行研究を見ると、孝標女の物語に対する熱中と宗教に対する信仰を対置して考えることが一般的な認識であったため、信仰と深くかかわっている夢に対する態度も、夢を「信じない」から「信じる」に変わったと単純に分けてしまうことが多かったようである。孝標女の信仰と『更級日記』の構図は次のようにまとめられている。

物語への耽溺⇨夢のお告げに対する軽視⇨信仰心の欠如

← 「前世の夢」を見る

← 夢のお告げに対する篤信⇨神仏への信仰⇨物語に耽溺することへの悔恨

しかし、この構図に対し筆者はいくつかの疑問を抱いている。「前世の夢」より前の記事は、確かに孝標女が物語に夢

中になっているような内容が多く書かれているが、果たしてそれが「信仰心の欠如」であると断言できるだろうか。そもそも高德の僧でも見ることが難しいとされる「前世の夢」を、どうしてそれまで「信仰心の欠如」している孝標女が見ることができたのか。十一例の夢に対する孝標女の態度は、「前世の夢」を境に、二つの類型に分けられるが、彼女の態度を、単純に夢を「信じない」と「信じる」に分けてよいだろうか。なぜ「前世の夢」がその態度の変化の境目となったのか。夢の中で伝えられた「前世」は日記全体においてどんな意味合いを持っているのか。

以上の疑問を解明すべく、「前世の夢」の前後の記事を読み直し、孝標女の夢と信仰に対する態度を再確認する必要がある。

三 孝標女の神仏への信仰

「前世の夢」までの記事は孝標女が物語に耽溺する内容が多く見られるが、信仰についても全く触れていないわけではない。物語耽溺に隠されている孝標女の信仰の状態を確認しよう。

資料(五)

等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、身を捨てて額をつき祈り申すほどに、十三になる年、のぼらむとて、九月三日門出して、(傍線は筆者による。——線は神仏に對する祈願の内容。……線は祈願が叶った内容。以下同。)

一三頁

資料(五)では、孝標女は父の任国上総の国で初めて継母と姉から『源氏物語』を聞かされ魅了された。早く都に戻って、多くの物語を読みたいと、孝標女は懇願していた。その懇願を託す対象は、彼女自ら造ったという等身の薬師仏である。当時、仏像を造ること自体が既に仏教的に大きな功德を積む行為であり、^{viii}薬師仏は衆生の病苦を癒し、現世利益の願いを叶えてくれる仏として信仰を集めていた。^{ix}十代の女の子が等身の仏像を造るとは、そう簡単にできることだとは思えないが、物語への切望と薬師仏への敬虔な信心に突き動かされ、孝標女は薬師仏を造るという困難な作業をやり遂げた。また、造仏の行為は後の「前世の夢」との関連も指摘され、「前世」は仏師であり、多くの仏像を造った記述と照応している。^xそして、「身を捨てて額をつき祈り申す」甲斐があつ

て、孝標女が十三歳になった時に京の都に戻ることで、最初の祈願が見事に叶った。一見物語への憧憬がこの念願成就の起因のように見えるが、少女期よりすでに抱いている宗教に對する深い関心と篤い信心による念願成就というべきであらう。

資料(六)

いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるままに、「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへ」と、心のうちに祈る。親の太秦にこもりたまへるにも、ことごとなくこのことを申して、出でむまにこの物語見はてむと思へど見えず、いとくちをししく思ひ嘆かるるに、をばなる人の田舎よりのぼりたる所にわたいたれば、……(略)帰るに、「何をか奉らむ。まめまめしき物は、まさなかりなむ。ゆかしくたまふなる物を奉らむ」とて、源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将、とほぎみ、せりかは、しらら、あさうつなどいふ物語ども、一ふくろとり入れて、得て帰るここちのうれしさぞいみじきや。

三四〜三五頁

資料(七)

七日さぶらふほども、ただあづま路のみ思ひやられて、

よしなし事からうじてはなれて、「平らかにあひ見せた
まへ」と申すは、仏もあはれと聞き入れさせたまひけむ
かし。

六〇頁

資料（八）

あづまに下りし親、からうじてのぼりて、西山なる所に
落ち着きたれば、そこにみなわたりて見るに、いみじう
うれしきに、

六七頁

資料（六）では、都に戻ってから思うように『源氏物語』
を読むことができなかったため、孝標女は「この源氏の物
語、一の巻よりしてみな見せたまへ」と、いつも心のうちに
祈っていた。そして、家族と一緒に太秦に参拝したときも、
このことを懇願した。この祈願がすぐには実現できず嘆いて
いるうちに、田舎から上洛してきたおばさんから、源氏物語
とほかの物語をもらい、願いが叶った。

資料（七）は、資料（六）から少し時間を隔て、孝標女が
二十八歳のころの記事で、父孝標の常陸への赴任を心配し、
太秦の広隆寺に参籠し、父の無事を祈った。以前の祈願がこ
とごとく成就したためか、孝標女は「仏もあはれと聞き入れ
させたまひけむかし」と信じ、この祈願の実現を期待してい
たようである。そして、資料（八）では、その祈願から四年

後、父が任期満了し京に戻ったと記され、孝標女の祈願がま
たも成就したことがわかる。

資料（五）（六）では、孝標女が物語に熱中し、物語を読
みたいといった願いを神仏に懇ろに訴えた。孝標女にとつ
て、「物語」が仏への信仰と対立するものであれば、物語へ
の執着を神仏に訴えることをしなかっただろう。当時の貴族
の信仰は、昇進や一家の繁栄、病気の治癒や旅の安全などを
祈願する「現世利益」が重視^{xi}されている。神仏を拝んだり、
祈願したりすることは、むしろ当時の貴族たちの慣習であ
り、日常生活の一部となっていたことがうかがえる。

また、神仏への祈願のほかに、日記には孝標女の母を含め
親族の数人が尼となり、孝標女と尼たちとの歌のやり取りな
どが多く記されている。

資料（九）

・雪の、日を経て降るころ、吉野山に住む尼君を思ひや
る。

雪降りてまれの人も絶えぬらむ

吉野の山の峰のかけみち

四七頁

・そこ（東山）なる尼に、「春まで命あらばかならず来
む。花ざかりはまづ告げよ」など言ひて帰りにしを、年か

へりて三月十余日になるまで音もせねば、

契りおきし花のさかりを告げぬかな

春やまだ来ぬ花やにほはぬ

五四頁

・親族なる人、尼になりて、修学院に入りぬるに、冬ごろ、

涙さへふりはへつつぞ思ひやる

あらし吹くらむ冬の山里

六六頁

・十月になりて、京にうつろふ。母、尼になりて、同じ家の内なれど、方ことに住みはなれてあり。

六八頁

・尼なる人なり。

世のつねの宿の蓬を思ひやれ

そむきはてたる庭の草むら

一一一頁

日記の中で、孝標女は物語に耽溺し勤行を怠ったことを反省していた内容もあったが、彼女にとって神仏はそれほど疎遠な存在ではなかったようである。日常的に家族と物詣に出かけたり、神仏に祈願したりすることが日記に記されている。また、京の都に上りたいという祈願、『源氏物語』を読みたいという祈願、父の安全を祈る祈願など、孝標女が神仏

に祈願したことは、その後の記事を確認すると、ほとんど実現できたのである。心願の成就是また一層孝標女の神仏に対する信心を深めたのであろう。のちに孝標女の母が出家するなど、家族や関係者が出家したり、吉野山の尼や東山の尼たちと歌のやり取りを行ったりするなどの内容が日記に記されている。孝標女周辺の関係者の中には、出家者や信仰が篤い人が多く、その人たちとの関わりによって、彼女も一層神仏に親しみを感じたのではなからうか。孝標女は、神仏を身近な存在として親しみ、日常的な形で神仏を信仰し続けたことといえるだろう。

四 孝標女の夢に対する態度

長暦三年（一〇三九）、孝標女が推定年齢三十二歳のとき、母の出家と父の隠居により一家の主婦として据えられる。その後、祐子内親王家に出仕することになり、慣れない宮仕えで不安と緊張を感じていた。このように生活が大きく変わった状況の中、孝標女は「前世の夢」を見る。全十一例の夢の六番目である。夢の一覧表を参照しながら、孝標女の夢に対する態度を「前世の夢」の前後の記事を中心に確認してみよう。

夢①、②、④、⑤に対する孝標女の態度は「人にも語ら

推定年齢	夢を見る時の状況	夢の内容	作者の態度
① 十四歳	(源氏物語を) 一の巻よりして、人もまじらず几帳の内にうち臥して、引き出でつつ見るこち、後の位も何にかはせむ。昼も日ぐらし、夜は目の覚めたるかぎり、灯を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、おのづからなどは、そらにおぼえ浮ぶを、いみじきことに思ふに	夢に、いと清げなる僧の黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五の巻をとく習へ」と言ふと見れど、	人にも語らず、習はむとも思ひかけず、物語のことをのみ心にしめて、
② 十四歳	物語のことを、昼は日ぐらし思ひつづけ、夜も目の覚めたるかぎりは、これのみ心にかけたるに、	夢に見ゆるやう、「このころ、皇太后宮の一品の宮の御料に、六角堂に遣水をなむ造る」と言ふ人あるを、「そはいかに」と問へば、「天照御神を念じませ」と言ふと見て、	人にも語らず、なにともしはでやみぬる
③ 十五歳	(姉の夢) 姉のなやむことあるに、ものさわがしくて、この猫を北面にのみあらせて呼ばねば、かしこましく鳴きののしれども、なほさるにてこそはと思ひてあるに、わづらふ姉おどろきて、「いづら、猫は。こち率て来」とあるを、「など」と問へば、	「夢に、この猫のかたはらに來て、『おのれは、侍従の大納言殿の御むすめの、かくなりたるなり。さるべき縁のいささかありて、この中の君のすずろにあはれと思ひ出でたまへば、ただしばしここにあるを、このごろ下衆の中にありて、いみじうわびしきこと』と言ひて、いみじう泣くさまは、あてにかしげなる人と見えて、うちおどろき足れば、この猫……」	……と語りたまふを聞くに、いみじくあはれなり。……「侍従の大納言の姫君のおはするな。大納言殿に知らせたてまつらばや」と言ひかくれば、……

推定年齢	夢を見る時の状況	夢の内容	作者の態度
④ 二十八歳	それにも、例のくせは、まことしかべい ことも思ひ申されず。彼岸のほどにて、 いみじう騒がしうおそろしきまでおぼえ て、うちまどろみ入りたるに、	御帳のかたのいぬふせぎのうちに、青き織物の衣を着て、錦 を頭にもかづき、足にもはいたる僧の、別当とおぼしきが寄 り来て、「ゆくさきのあはれならむも知らず、さもよしなし 事のみ」と、うちむつかりて、御帳のうちに入りぬと見て も、	うちおどろきて も、「かくなむ見 えつる」とも語ら ず、心にも思ひと どめでまかでぬ。
⑤ 二十八歳	(僧の夢) 母、一尺の鏡を鑄させて、え 率て参らぬかはりにとて、僧を出だし立 てて初瀬に詣でさすめり。「三日さぶら ひて、この人のあべからむさま、夢に見 せたまへ」など言ひて、詣でさするなめ り。	この僧歸りて、「…御帳の方より、いみじうけだかう清げに おはする女の、うるはしくさうぞきたまへるが、奉りし鏡を ひきさげて、…『この鏡を、こなたにうつれる影を、見よ。 これ見れば、あはれに悲しきぞ』とて、さめざめと泣きたま ふを、見れば、伏しまろび泣き嘆きたる影うつれり。『この 影を見れば、いみじう悲しな。これ見よ』とて、いま片つ方 にうつれる影を見せたまへば、御簾ども青やかに、几帳押し 出でたる下より、いろいろの衣こぼれ出で、梅桜咲きたる に、鶯、木づたひ鳴きたるを見せて、『これを見るはうれし な』とのたまふとなむ見えし」と語るなり。	いかに見えけるぞ とだに耳もとどめ ず。

推定年齢	夢を見る時の状況	夢の内容	作者の態度
⑥ 三十二歳	ひじりなどすら、前の世のこと夢に見るはいとかたかなるを、いとかう、あとはかないやうに、はかばかしからぬここに、夢に見るやう、	清水の礼堂にゐたれば、別当とおぼしき人出で来て、「そこは、前の生に、この御寺の僧にてなむありし。仏師にて仏をいと多く造りたてまつりし功德によりて、ありし素性まさりて人と生れたるなり。この御堂の東におはする丈六の仏は、その造りたりしなり。箔をおしきして亡くなりしぞ」と。「あないみじ。さは、あれに箔おしたてまつらむ」と言へば、「亡くなりししかば、こと人箔おしたてまつりて、こと人供養もしてし」と見てのち、	清水にねむごろに参りつかうまつらましかば、前の世にその御寺に仏念じ申しけむ力に、おのづからようもやあらまし、
⑦ 三十八歳	暮れかかるほどに詣で着きて、斎屋におりて、御堂にのぼるに、人声もせず、山風おそろしうおぼえて、おこなひさしてうちまどろみたる夢に、	「中堂より麝香賜はりぬ。とくかしこへ告げよ」と言ふ人あるに、	うちおどろきたれば、夢なりけりと思ふに、よきことならむかしと思ひて、おこなひ明かす。
⑧ 三十九歳	その夜、山辺といふ所の寺に宿りて、いと苦しけれど、経すこし読みたてまつりて、うちやすみたる夢に、	いみじくやむごとなく清らかなる女のおはするに参りたれば、風いみじう吹く。見つけて、うち笑みて、「何しにおはしつるぞ」と問ひたまへば、「いかでかは参らざらむ」と申せば、「そこは内裏にこそあらむとすれ。博士の命婦をこそよくかたらはめ」とのたまふと思ひて	うれしく頼もしくて、いよいよ念じたてまつりて、

推定年齢	夢を見る時の状況	夢の内容	作者の態度
⑨ 三十九歳	三日さぶらひて、暁までむとて、うねぶりたる夜さり、	御堂の方より、「すは、稲荷より賜はる験の杉よ」とて、物を投げ出づるやうにするに、	うちおどろきたれば、夢なりけり。
⑩ 四十七歳	同じ心に、かやうに言ひかはし、世の中の憂きもつらきもをかしきも、かたみに言ひかたらふ人、筑前に下りてのち、月のいみじう明かきに、かやうなりし夜、宮に参りて会ひては、つゆまどろまらずながめ明かいしものを、恋しく思ひつつ寝入りにけり。	宮に参りあひて、うつつにありしやうにてありと見て、	うちおどろきたれば、夢なりけり。
⑪ 四十八歳	さすがに命は憂きにも絶えず長らふめれど、後の世も思ふに叶はずぞあらむかしとぞうしろめたきに、頼むこと一つぞありける。天喜三年十月十三日の夜の夢に、	居たる所の家のつまの庭に、阿弥陀仏立ちたまへり。さだかには見えたまはず、霧ひとへ隔たれるやうに透きて見えたまふを、せめて絶え間に見たてまつれば、蓮華の座の土をあがりたる高さ三四尺、仏の御たけ六尺ばかりにて、金色に光り輝きたまひて、御手、片つ方をばひろげたるやうに、いま片つ方には印を作したまひたるを、こと人の目には見つけたてまつらず、われ一人見たてまつるに、さすがにいみじくおそろしければ、簾のもと近くよりもえ見たてまつらねば、仏、「さは、このたびは歸りて、のちに迎へに来む」とのたまふ声、わが耳一つに聞こえて、人はえ聞きつけずと見るに、うちおどろきたれば、十四日なり。	この夢ばかりぞ後の頼みとしける。

ず」「耳もとどめず」という表現が使われており、夢への軽視だと考えられがちである。しかし、何十年の人生を経て日記を執筆した晩年に、これらの夢を覚えていて、日記に書き綴ることから、孝標女がいかに夢を重視していることがわかる。^{xii} 平安時代の夢解きの風習を考えると、夢が神仏からの「お告げ」だと信じられており、夢を信じることが神仏を信仰することと考えられている。だから、夢の内容を大事に記録し、夢で示した通りに行動することが一般的な慣習であったが、^{xiii} むやみに他人に夢の内容を話さないことも当時の慣習である。「靈性をもたない一般人に夢を話してしまうことは、夢の合わせ方の良し悪し以前に、それだけで、吉夢が正夢となる可能性を逸することを意味した。」「さらに吉夢のみならず、夢そのものをむやみに他人に話してはならぬ、とされることもあった」。^{xiv} 孝標女が夢のお告げを「人にも語らず」、むやみに行動しなかったのは、夢がどのように解き明かされるかわかる前に、夢に対する慎重な姿勢を取っていたとも捉えられる。夢を軽視し否定するのではなく、夢を信じ期待しているからこそその対応であろう。

夢③は、孝標女と姉が飼っていた猫が姉の夢に現れ、侍従の大納言の娘であることを告げた、いわゆる「猫の転生」の夢である。孝標女は若くして亡くなった侍従の大納言の娘の境遇を憐れみ、彼女の転生であろう猫を「思ひかしづく」。

時々一人でいるときに、「侍従の大納言の姫君のおはするな。大納言殿に知らせたてまつらばや」と、猫に声をかけたりにしていた。また、家の火事で猫が亡くなった時に、父孝標はこの猫の転生の話を知り、「めづらかにあはれることなり。大納言に申さむ」と言い、「いみじうあはれに、くちをしくおほゆ」。

孝標が猫の夢に対する態度について、「この父の言葉は、
：猫をいとおしむ娘に調子を合わせたもの」^{xv}とし、父親が娘たちの物語ごっこに付き合っていただけという理解もある。

しかし、当時、『日本靈異記』『日本往生極樂記』『大日本国法華経験記』などの説話集がすでに編纂・流布されており、多くの往生譚の予知夢や前世を明かす転生夢も読まれていたと考えられる。夢の神秘性を重視する予知夢や転生夢は、王朝期になると個人的なレベルでの夢信仰の主たる内容となった。^{xvi} 孝標も物語好きな娘たちの空想に付き合うだけではなく、猫の転生の夢を本当に信じていたのではないだろうか。

夢④は孝標女が推定年齢二十八歳のときに見た夢である。常陸国に赴任した父孝標を思いながら、母と心細く暮らす孝標女は、「父不在」という理由で満足に物詣につれていってもらえないことで母に対する不満をこぼしていた。この不満は、「真摯な信仰からではあるまい」^{xvii}と指摘されている。確かにこの記事の前には、物語に夢中になり、日頃の物詣や読

経などを人並みに行っていなかったことが述懐文として綴られている。しかし、この述懐の文に述べられているように、積極的で熱心に物詣や勤行を行わなかったとしても、「わづかにしても」孝標女は物詣を続けており、通常の生活の一環として習慣的に物詣や読経を行っていたと考えられる。その通常の生活の一部、習慣的なことができなくなってしまったため、思わず不満をこぼしてしまったのではないだろうか。

その後、母に引き連れられて参籠した清水寺で、別当とおぼしき僧に「ゆくさきのあはれならむも知らず、さもよしなし事をのみ」と告げられた夢(④)を見る。「父不在」という心細い環境であつたため、なおさら将来のことが心配になり、それを考えなさいと促すような夢である。

夢④に應えるように、夢⑤では、娘の行く先を心配する母は、初瀬寺に代参の僧を行かせ喜悲両相の夢を見てきた。一方は「伏しまろび泣き嘆きたる」影を映しており、もう一方は青い御簾に色とりどりの出し衣、咲いた梅桜に鳴きたる鶯という様子である。青い御簾、色とりどりの出し衣、庭に咲く梅、桜、そしてその木の枝で鳴く鶯は、安定した経済的に余裕のある生活を象徴している。夢⑤はいわゆる「予知夢」であり、孝標女の悲しそうな将来と、それと対照的な幸せそうな将来の二つの将来が予言された。

晩年、夫が亡くなった後、悲しい中で孝標女はこの夢解き

を思い出す。

資料(十)

初瀬に鏡奉りしに、伏しまろび泣きたる影の見えけむは、これにこそはありけれ。うれしげなりけむ影は、来しかたもなかりき。今ゆく末はあべいやうもなし。

一〇七頁

夫と子供に囲まれ、平穏な家庭生活を過ごしている孝標女は、夫の急死によって生活の支えと精神的な支えを失い、意気消沈としていた。この夢で予言された二つの将来のなか、「伏しまろび泣き嘆きたる」影だけは、まさに深い喪失感の中に陥った今の自分の写しであるが、もう一方の幸せそうな様子は今まででもなかったし、これからもあるはずがないと嘆いていた。日記の中に夫についての描写が少なく、結婚後の家庭生活もそれほど書かれていないことは、この日記の一つの特徴としてしばしば取り上げられるが、果たして孝標女自身で思っているように「不幸」ばかりであったのだろうか。

資料(十一)

今はひとへに豊かなる勢ひになりて、双葉の人をも思ふさまにかしづきおほしたて、わが身もみくらの山に積み

余るばかりにて、後の世までのことをも思はむと思ひは
げみて、十一月の二十余日、石山に参る。 八七頁

資料（十一）は、孝標女がおよそ三十八歳のときの内容である。結婚して、宮仕えにも慣れてきて、積み切れぬほどの財産を蓄えていて、夫を頼りにし、子供を大切に育てているといった安定した幸福な生活ぶりがかがえる。

その翌年、大嘗会の御禊の日、世間と反対に初瀬詣でに出かけようとする孝標女は、周囲に反対される中、「児どもの親なる人」、つまり夫の「心にこそあらめ」の一言に後押しされ、初瀬詣でに出かけた。それ以後も、鞍馬、石山、太秦や和泉など、しばらく日記に孝標女の物語と旅の内容が続く。安定した生活があったからこそ、彼女は思うままに物語ができたと考えられる。日記の中で夫に対する言い方が「児どもの親なる人」「頼む人」であり、孝標女にとって夫がいかに重要な存在であったかがこの言い方からうかがえる。夫を後ろ盾に経済的な面でも信仰の面でも安定した孝標女の生活ぶりは、まさに初瀬寺で僧が見た予知夢の幸せそうな様子ではないだろうか。悲喜両相の夢の予言通り、安定した生活を送っていた孝標女は、五十一歳のときに夫の急死によって、悲しいどん底に陥れられた。悲喜両相の夢と目的中したが、夫との死別の喪失感があまりにも深いため、孝標女は悲しい

夢だけの夢中したと感じていたのであろう。

ここまでの夢で見てきたように、孝標女の夢に対する「不信心」はどこにも確認できない。彼女は日常的習慣的な形で神仏に親しみ、神仏への信仰の一環として夢を大事に思い、慎重な態度をもって対応していた。また、自ら参籠したり、代参の僧を立てたりするなど、霊夢を求める行動も起こしていた。孝標女のみならず、その父や姉を含む当時の人々にとつては、夢は神仏の啓示を得る唯一の方法として信ずべきものであり、その夢は現実と同等の比重を持ち、いつか実現するもう一つの現実と考えられている。^{xix} 夢は信仰の一環であり、時には信仰そのものと考えられていることもある。

夢⑥は「前世の夢」である。孝標女の「前世の夢」とその後の夢に対する態度を確認しよう。

孝標女の前世は清水寺の仏師であり、たくさん仏像を造って善行を積んだ功績によって、現世はより家柄がまされた人に生れ変わったと、清水寺の別当らしき人から伝えられたという夢である。前世で造った丈六の仏に「箔をおしさして亡くなりしぞ」と聞いて、夢の中にもかかわらず、「あないみじ。さは、あれに箔おしたてまつらむ」と、孝標女は言った。彼女にとっては、前世は清水寺の仏師だったことも、丈六の仏を造ったことも、途中までその仏に金箔を貼っていたことも、当然みな事実であるとして信じているからこそその反

応であろう。そして、前世にて「仏をいと多く造りたてまつりし功德によりて、ありし素性まさりて人と生れたる」ということも信じているのであろう。

前世の功德によって、今生が約束される。となれば、今生で功德を積んでおけば、来世が期待できるとすぐに連想される。孝標女にとってこの夢が重要なのは、前世は「仏師」であつたことや、今生は「素性まさりて」転生できたことを知つただけではなく、来世に関する暗示が隠されているからではないだろうか。

その背景には、永承七（一〇五二）年、末法の世の到来によって、絶望感と虚脱感が貴族社会に広がり、浄土信仰の傾向が広がり、「来世」や「往生」について期待が大きくなつてきたことがある。つまり、前世の夢を見ることで、孝標女は今生の行いによって、さらに今生よりもまさる来世を期待しているのであろう。

前世の夢以後、孝標女は夢のお告げに対して素直に喜び、具体的な行動をとるようになった。たとえば、夢⑦「よきことならむかしと思ひて、おこなひ明かす」、夢⑧「うれしく頼もしくて、いよいよ念じたてまつりて」、夢⑪「この夢ばかりぞ後の頼みとしける」となっている。夢を信じる態度は、「前世の夢」の前後は同様と言える。しかし、ここまで見てきたように、孝標女は少女期から宗教的な関心が高く、

神仏への信仰も篤かった。「前世の夢」を見るまで、彼女の夢や神仏に対する祈願は、「現世利益」的な信仰であり、ほとんど成就できたのである。しかし、どちらかというと、いつか夢や祈願を叶えてくれると心の中で信じ待っていただけのような、比較的に消極的な態度と行動を取るのが多かつたともいえよう。「前世の夢」以後は、浄土信仰の影響で、孝標女の信仰は「現世利益」から来世を期待しつつ往生を待つという「来世希求」に移行し、夢のお告げを喜び、勤行の励みにし、積極的に行動するようになった。

五 「前世の夢」と「阿弥陀来迎の夢」

これまで見てきたように、「前世の夢」は孝標女の信仰の形態が「現世利益」から「来世希求」に変わるきっかけであるともいえよう。その変化のきっかけになった理由は、「前世の夢」に書かれている転生のことに関わっているのである。

「前世の夢」に「仏師にて仏をいと多く造りたてまつりし功德によりて、ありし素性まさりて人と生れたるなり」とあるように、「人間」から「人間」へ、しかも「仏師」から「貴族の娘」に転生したことが書かれている。

「ありし素性まさりて人と生れたる」の部分においては、

「仏師」から「貴族の娘」に転生することで「素性まさりて」として理解してよいかどうか、仏道に比較的に近い「仏師」から女の身として生まれ変わることが、かえって仏道に遠ざかってしまうのではないかなど、さまざまに論じられていた。^{xxi} その一例として、久保朝孝「更級日記の夢―前世夢の機構―」^{xxii}の中では、孝標女とほぼ同時代の仏師定朝の例を挙げ、仏師の社会的地位の向上が特に目を見張る当代では、「仏師の素性が従四位上上総介常陸介菅原孝標の娘と比較して大きく劣ると、俄には思われない」といつている。また、『法華経』巻五「提婆達多品」第十二や『日本往生極楽記』の記述を挙げ、今生に女人として生を受けることは、極楽往生願にとつては不可能ならずともきわめて不利であることだ^{xxiii}と言えるとし、「前世における僧・仏師としてのあまたの功德にもかかわらず、現世に往生から遠く隔てられた女身として転生する無理が見えて」くると述べている。

こう指摘したうえで、久保朝孝は前世の夢の転生についてなぜ無理な記述をなされたかについて、次のように指摘されている。『大日本国法華経験記』『今昔物語集』に収める『法華経』の靈験譚を挙げ、「説話としての基本構造はほぼ全話に共通していて、前生夢説話の型を理解するのに便利」であり、『更級日記』の前世の夢についての「記述の不審・無理は、先行前生夢説話の構成を型通りそのまま取り入れたこと

に起因するものであったと考えられることになろう」。^{xxiv}

『更級日記』の夢、就中「前世の夢」における往生説話を主とする説話文学の受容については、また改めて別の機会に取り上げることとし、『更級日記』の中に書かれている「前世」に関する内容を確認しておこう。

資料（十三）

この皇女、おほやけ使を召して、『われ、さるべきにやありけむ、このをのこの家ゆかしくて、率て行けと言ひしかば率て来たり。……（略）これも前の世に、この国に跡を垂るべき宿世こそありけめ。……』 二〇頁

資料（十四）

「夢に、この猫のかたはらに來て、『おのれは、侍従の大納言殿の御むすめの、かくなりたるなり。さるべき縁のいささかありて、この中の君のすずろにあはれと思ひ出でたまへば、ただしばしここにあるを、三九〇四〇頁

資料（十五）

世の中に、長恨歌といふふみを物語に書きてあるところあんなりと聞くに、いみじくゆかしけれど、え言ひやらぬに、さるべきたよりを尋ねて、七月七日言ひやる。

資料（十六）『長恨歌』

（略）上窮碧落下黃泉 兩処茫茫皆不見

忽聞海上有仙山 山在虛無縹渺間

樓閣玲瓏五雲起 其中綽約多仙子

中有一人字太真 雪膚花貌參差是（略）

資料（十三）は上京の旅の途中、武蔵国で聞いた「竹芝伝説」である。皇女が東下りして、衛士の故郷の武蔵国に大変興味を示し、「これも前の世に、この国に跡を垂るべき宿世こそありけめ」と言い、武蔵国に下ったのは「宿世」であるとしている。「宿世」とは、前世から定まった運命のことである。前世の因縁により今生の運命が決められ、今生はその決められた運命を生きたという意識であろう。

資料（十四）の猫の転生の夢の中でも、侍従の大納言の娘が「さるべき縁のいささかありて」ということで、しばし猫に生れ変って孝標女と姉のそばにいと、姉の夢の中で語っていた。

また、この猫の転生の夢のすぐあとに、孝標女は「世の中に、長恨歌といふふみを物語に書き」変えられたものがある」と聞き、それを借りて読みたいと言う内容が続く。「長恨

歌」にも「前世」「転生」に関わる句が詠まれている。資料（十五）はそれである。

楊貴妃が殺されたあと、玄宗皇帝は彼女への思慕やまず、道士に命じて楊貴妃の魂のありかを探させる。引用した資料（十六）の部分は道士がようやく海上の仙山に楊貴妃（の魂）を見つけた部分である。死んだはずの楊貴妃は、海上の仙山にいることは、彼女が大往生を遂げたことを示唆される。

上記の三つの記事は、いずれも孝標女がまだ物語に耽溺している若き頃のことであった。前述したように、孝標女の幼少期、青年期は、物語や説話に没頭し、宗教的な関心をさほど持っていなかったと思われるが、彼女が興味を示した物語、説話の中に当時の人々の宗教・信仰と関わる重要なテーマが取り上げられ、そのようなテーマを持つ物語・説話に心を惹かれることも、彼女の宗教的関心の高さと信心の深さの表れであろう。このように、中年期になった孝標女は、突然「ひじりなどすら」「見るはいとかたかなる」とされる「前世の夢」を見るのではなく、それまでに、『更級日記』の中にすでにいくつかの「前世」「転生」「宿世」「往生」に関わる記事を織り込まれ、「前世の夢」の伏線として記されている。これらの記事から、当時の人々は「輪廻転生」や「往生説話」について、大変篤い信仰を抱いているこ

とがみてとれる。孝標女も夢で明かされた自らの「前世」を信じ、来世への期待を膨らませていた。

そして、日記のクライマックスに記させた夢⑪「阿弥陀仏来迎の夢」は、日記の中で唯一具体的な年月日が記載された箇所である。それだけ、孝標女はこの夢に対して特別な思いを持っているといえよう。夢の中、仏は「さは、このたびは歸りて、のちに迎へに来む」と、孝標女一人だけに聞こえるように彼女と約束をしたというのである。夫を失って悲嘆に暮れる老残の境地におかれた孝標女にとっては、この夢は唯一の頼みとなる。「前世」の功德で「素性まさりて人と生れたる」現世につながる。そして、現世で積んだ功德によってまた来世の極楽往生が期待できそう。孝標女が「前世の夢」を信じて疑わずにいたのは、「阿弥陀仏来迎の夢」で「来世」が約束されていたからであろう。「前世の夢」もまた「阿弥陀仏来迎の夢」の伏線として、十一例の夢の中間に位置づけられ、終結部の「阿弥陀仏来迎の夢」と照応しながら、孝標女の信仰意識を表している。

六 結びに

「夢」と「信仰」とを対置させた今までの『更級日記』の構成の捉え方と違う視点から、『更級日記』の十一例の夢と

彼女の信仰との関わり、特に「前世の夢」の機能と意味について見てきました。「前世の夢」は孝標女の信仰の形態が「現世利益」から「来世希求」に変わるきっかけであり、日記の最後の夢「阿弥陀仏来迎の夢」の伏線として、その夢と照応しながら孝標女の信仰意識を表している。また、「前世の夢」などの夢は、物語や説話からの影響が多く見られる。今回は物語と説話の受容については取り上げられなかったが、また今後の課題にしよう。

本文引用 秋山虔 新潮日本古典集成『更級日記』解説
新潮社 一九八〇年

- i 関根慶子 講談社学術文庫『更級日記』上下 一九七七年、森田兼吉「夢よりもはかなき——女流日記文学と夢」(佐藤泰正編『文学における夢』笠間選書九三) 笠間書院 一九七八年、秋山虔 新潮日本古典集成『更級日記』解説 新潮社 一九八〇年、今井卓爾『更級日記』譯注と評論 早稲田大学出版部 一九八六年、長谷川政春 今西祐一郎 伊藤博 吉岡曠校注 新日本古典文学大系二十四『土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』解説 岩波書店 一九八九年など

- ii この「十五」「十六」は森田の論文の中の番号となっている。十五は長谷寺に代参した僧の夢、十六は前世の夢。
- iii 同2
- iv 秋山虔（新潮日本古典集成）『更級日記』新潮社 一九八〇年
- v 長谷川政春 今西祐一郎 伊藤博 吉岡曠（新日本古典文学大系）『土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記』岩波書店 一九八九年
- vi 今井卓爾『更級日記 譯注と評論』早稲田大学出版部 一九八六年
- vii 前掲森田兼吉論文「夢よりもはかなき——女流日記文学と夢」二十二～四十ページ
- viii 安藤重和『『更級日記』の夢と信仰』（女流日記文学講座 第四卷 『更級日記・讃岐典侍日記・成尋阿闍梨母集』勉誠社 一九九一年九月）
- ix 前掲秋山（集成）頭注 一三頁。前掲吉岡曠（新大系）脚注 三七一頁 など。
- x 前掲今井著書。「前世の夢」の章段では、「仏師にて」の注釈のところでは「在上総時の造仏暗示か」と解釈している。
- xi 三橋正『平安時代の信仰と宗教儀礼』（続群書類従完成会 二〇〇〇年）。一族の繁栄を祈願する霊場参詣信仰は「積極的」現世利益祈願といえ、息災・延命を祈る邸内での修法や読経・毎日の念誦など、平穏な日常生活を維持す

- xii するための信仰は、「消極的」現世利益祈願と言える。撰関期には両者共に盛んになって行くが、特に国家観念や氏族の集団意識が喪失していく中で、「個人（自分）」に降り懸かる災厄が前代以上に強調され、後者の「消極的」現世利益を目的とする宗教への依存が増したと考えられる。
- xiii 伊藤守幸は『更級日記研究』（新典社 一九九五年）第四章「方法としての夢」の中で、「そうした言い方にもかかわらず、作中に夢が記しとどめられているという事実によって即座に（夢を軽視する態度を）否定されてしまう」。「夢がどのように解き合わされるか」ということを気にして、迂闊には口にもできないほどこれらの夢を気にかけていたことが明らかになるだけである」。
- xiv 西郷信綱『古代人と夢』平凡社 一九七二年、河東仁『日本の夢信仰——宗教学から見た日本精神史——』玉川大学出版部 二〇〇二年など
- xv 前掲河東仁著書。例として、『大鏡』の「師輔伝」、建春門院中納言の日記『たまきはる』、『源氏物語』の「横笛」、「赤染衛門集」などが挙げられている。
- xvi 秋山虔『更級日記』（集成）頭注 四三頁
- xvii 前掲河東仁著書。二五七頁
- xviii 秋山虔『更級日記』（集成）頭注 六三頁
- xix 前掲森田兼吉論文「夢よりもはかなき——女流日記文学と夢」
- x 前掲河東仁『日本の夢信仰——宗教学から見た日本精神史

—— 一二五二頁

XX

前掲三橋正『平安時代の信仰と宗教儀礼』三九三頁。「仏教に「積極的」現世利益・「消極的」現世利益・来世希求という三つの異なった機能をまとめ、その中の「消極的」現世利益的信仰を日常の仏教信仰の中心に据えるという特徴は、平安貴族の信仰にみられる。」

XXI

早くも『更級日記新注』では、「前世の家がらにまざった家に生れ出たのである。前世は仏師などであつたものが、菅原氏の家に生れ出たといふこと」と解釈されていた。それ以後の注釈書も、おおかた『新注』の解釈に同調している。つまり、前世では、清水寺の仏像を彫像する仏師であつて、たくさん仏像を造つて善行を積んだ功績によつて、現世では「仏師」より家柄がまさつた貴族の人間に生れ変つたというような解釈が一般的である。諸解釈の中で、秋山虔は「家柄がまさつて貴族の娘に生れ変つた」、今井卓爾は「前世の仏師から貴族菅原氏に生まれた」と、それぞれ現生の生まれ変わった対象として「貴族の娘」と「貴族菅原氏」に具体的に解釈されている。その一方、反論もある。

XXII

久保朝孝「更級日記の夢―前世夢の機構―」を参照（『古典解釈の愉悅―平安朝文学論攷―』世界思想社 二〇一年）一八五―一八六頁

XXIII

同じ論調は、たとえば前掲三橋正『平安時代の信仰と宗教儀礼』、吉原浩人「王朝貴族の信仰生活―『江都督納言願

XXIV

文集』にみる女性の願い―」にも見られる。『法華経』の龍女成仏説や『転女成仏経』による女人救済については、平安後期の貴族層においては誰でも知っている教養の範囲であつた。女身の五障は、おのずから女性に深い罪業観を抱かせる。その悲しみが末法に生きる身に累加され、法華一乗の道に帰依する契機となる。

前掲久保朝孝著書 一八六頁 一九〇頁